

とうかいどうよつやかいだん

東海道四谷怪談

〔解説〕

文政八年（一八二五）七月、江戸中村座で上演された、鶴屋南北の傑作「東海道四谷怪談」を浄瑠璃に仕立てたもの。江戸、四谷左門町に住んでいた田宮伊右衛門と妻のお岩の伝説を、「仮名手本忠臣蔵」の外伝という体裁で描いています。歌舞伎では、お岩を三代目尾上菊五郎、伊右衛門を七代目市川団十郎が演じ、当時、江戸中の人気をさらうほどの大ヒットとなりました。浄瑠璃化の初演は、天保二年（一八三一）七月、御霊境内の操り芝居で、作者は不明ですが、南北の作とは構成に大きな相違がありました。

〔伊右衛門住家の段 あらすじ〕

持病の逆上（のぼせ）で苦しんでいた於岩は、水庵からもらった薬を飲んでいます。（お岩に横恋慕している権平が忍び込んできて、お岩に冷たくあしらわれると、お岩の夫・伊右衛門が奥村の娘・小梅と深い仲になっており、水庵と謀ってお岩に毒薬を与えていることを告げます。）

外出していた奉公人の小助が、お岩夫婦の息子・伊之助を連れて帰ってきて、髪が抜け、顔も腫れ上がって醜くなったお岩を見て驚愕します。お岩も、自分が伊右衛門らに騙されていたことに気づきます。そこへ伊右衛門が帰宅し、怒りと嫉妬に狂うお岩に、小助と密通したとの罪をなすりつけ、二人を斬ってしまいます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

伊右衛門住家の段

さして出でて行く

既にその日も入相の、鐘かうかうと告げ渡り、まがきにすだく虫の音も、いとど淋しき留守の宿。

お岩はすめぬ案じ顔、いつか晴なん胸の闇、行燈取り出し火打ち箱、移す附け木の硫黄さへ、花なき夫の心根を、とやかう思ふ女氣の、一人くよくよかこち言

「ホンニ浮世と云ひながら、水の流れと人の行く末、元この身は塩谷家の奥勤め、縁でかな伊右衛門殿に思はれて、お暇願うて嫁入りの、間もなう産んだあの伊之助、主の世継ぎと楽しんで、育つる甲斐も情ない。生まれ落ちると疳の虫、我が身は産の悩みより血の道と云ふ立ち病ひ、其上俄か

にお家の騒動。思ひもよらぬ浪々に、尾羽打ち枯らす今の身の上。よくよく武運に尽き果てし、親子夫婦が身の上」

と、浮世を恨み身を託ち、そぞろ涙にくれけるが、思ひ蓄じて血の道の、逆上に思はずよくよく

「ア、また持病のこの逆上。どうぞ仕様はオ、ソレ、最善水庵殿が下されし、加減の粉薬、幸い」

と、白湯にかき立て二口三口、飲むは毒とも神ならぬ、身の成る果てぞ哀れなり。跡にお岩はせきのぼす、胸の炎をおししずめ

「オ、そうぢや、ぼんの戻らぬその内に髪なとといておきましよ」

と、有合ふ鏡台引出し、かかる千筋の後れ髪、コハ心得ずとまた取り上げ、解く程抜ける額髪両手

に丸めて打眺め

「ハテ合点の行かぬ今日に限つてのぼせの強さ、殊更髪はこの様に抜けるは病の業なるか」

と、言ひつゝ鏡の蓋取退け、向かへば写る怪しき顔、はつとびつくり立ち退いて、見れども辺りに人もなし、ハテ不思議なと立ち寄つて、また差向かふ鏡の影よく／＼眺めて、ヤア／＼／＼いつの間此顔が、この様に変はつたぞと、云ひつゝ我と我が顔をためつすがめつ目を留めて、見れば見るほど悪女の相好、ハアとばかりにどうと伏し、コハ何とせん悲しやと、狂気の如く立つ居つ、身悶えすれば胸先へ、持病のつかへが差込んで、そのままそこへ伏しまろび悶え苦しむ折からに、かかる事とはつゆ知らず、泣く子をすかして漸うと、帰る小助が門の口

「奥様さぞお待ちかね、何がモウ坊様がやんちゃばかり、四谷中をあちこちと、すかし廻つて漸う只今、ソレちやつと添乳をなされませと、言ひつゝ立ち寄りこれはさて、御病中に大胆千万、宵寝惑ひのおうたたね。エ、ちとお嗜みなされませ」と、傍へに稚子そつと置き、見れば苦痛の其有様。

「ヤア是はしたり、また例のお癪が起こつたか、奥様申し／＼エ、かてゝ加へて旦那はお留守、コリヤマアどうせう、何とせん」

かたへに有り合ふ土瓶のぬるみ、口押し分けて一口飲ませ、そのまま耳に口差し寄せ

「奥様、奥様いなう、お岩様いなう」

と、背撫でさすり様々と心を碎く介抱に、お岩は漸う息吹返し

「ハア。オ、小助か戻りやつたか、さうして坊は

どこに居やる」

「イヤモお氣遣ひなされますな、どうやらかうやら叩き付け、只今漸う寝かしましてごわりまする」

「オ、それはマア／＼嬉しう(びびる)」

「ア、イヤ申し奥様、それはさうとお前様は、いつのまに其様おつとろしいお顔にはならしやりましたぞいの」

「さればいの、いつもの通り伊右衛門殿、八幡宮へ参詣と、出て行かしやつたその後で、あんまりのぼせが強い故、水庵殿の加減の粉薬、二口三口飲みし所へ、直助の権平が裏から忍んで横恋慕、様々口説くその中にも、伊右衛門殿は奥村の娘に深く云ひ交はし、わしに愛想を尽かさうと、相好変へる薬まで整へしとは聞いたれども、よもや夫

がその様な非道な事はあるまいと、心で心取り直せど、のぼせは次第に強うなり、髪をすけば抜け落ちる、あまつさへ此顔の俄かに変はりし我が相好、ム、さては権平が詞に違はず、奥村親子が工みにて水庵に言ひ含め、毒薬を飲ませしよな、おのれそのまま置くべきか」

と、すつくと立つて表の方、駆け出さん其勢ひ、小助は慌てて抱き止め

「コレ申し奥様、ソリヤ悪い御了見、権平が詞を信じ、奥村へござつても、先に覚えのない時は、こなたばかりか旦那の恥、サまずまずお心をとつくりとお鎮めなされて下さりませ」

「イヤ／＼恥にならうが笑はれうが、モウかうなつた上からは姫御前の嗜みも、色を花香も捨てたつたわいなう、サアとめずと放しや、そこ退きや」

と、互ひに争う帯の端、繻子のしやら解け因果のはし、挑み争ふ、折こそあれ。戻りかかりし羽宮伊右衛門、何心なく我が家の内、這入るも知らぬ兩人が思はずばつたり行き当たり、互ひに見合す顔と顔

「ホこれはお旦那お早いお帰り」

とその場の首尾の手持ちなく、小助はもぢ／＼控え居る、お岩は夫の胸倉にしがみ付いて

「コレ伊右衛門殿、ようも／＼わしを騙し、毎夜

／＼ぬつけりと小梅と枕を交わしやつたなう」

と云ふも嫉妬のうわがれ声、角目立つたる形相に、驚きながらさあらぬ体

「ム、合点の行かぬこの場の様子、ガマそれは格別、その方が面体は何故にその様に見苦しくは変ぜしぞ」

「何故、何故とは、エ、白々しいわいの、コレこの様に生まれも付かぬ片輪にしたも、皆こなさんの心から、サア元の顔にして返しや」

と、取りつき嘆くを取て突き退け

「ヤア言はしておけば様々な戯言、おのれ等こそ身が留守に帯紐解いて不義密通、主の目を抜く不忠者、成敗の重ね斬り、覚悟ひろげ」

と難題を、聞くより小助は律儀一遍、涙と共に膝突きかけ

「コレ旦那様、イヤコレ伊右衛門殿、この小助を不義者とは、ソリヤこなた無理だ／＼、あんまりでござりますわいの。ホンニこの年月こなた様を世に出さうと、おらがこれ、このざまを見さつしやれ、盆も正月もコレ一点、日がな一日、町小遣いに駆け歩き、犬に吠えられ夜廻りの、お役人に

はエ、見咎められ、憂き艱難はいく何度、夜の目も碌に寝たことは、今の今迄ごはりませぬわいなう。それに氣強い今のお詞、エ、聞こえませぬ旦那殿」

と、畳叩いて恨み泣き。お岩も共に咳上げく

「上は女御お后より、賤しき賤の下々でも、連れ添ふ夫を大切に思ふは女の道なれど、お前に貧苦を見せまいと、濯ぎ洗いの賃仕事、心を碎く女房を、捨てて日陰のます花に、移り変わるのみならず、覚えのない身に疑いは、日頃の氣質に似合ひませぬ、むごいわいな」

とばかりにて、恨みのたけを夕闇の、雲に篠つく村時雨、晴れ間は更に泣くばかり。伊右衛門は耳にもかけず

「ヤア曲にも立たぬ世迷言、念仏申して成仏せよ、

南無阿弥陀仏」

と兩人を、なぶり殺しに七転八倒、無慚といふも哀れなる。かかるところへ表口、息を切つて駆け来る水庵

「コレく伊右衛門殿、お岩殿の相好を変へた薬は我らが秘薬、皆奥村の母御の頼み、氣の毒ながらお内儀を、手につけられしはもつけの幸い、サアこれから天井抜け、小梅殿とン盃事、誰憚らぬ三国一婿に成り済ました、しやんくく、えへへ、オホホ、ハハ、サアく早う」

とせき立つる、夫も今更後悔の詮方涙押包み

「現在女房子家来まで、不憫ながらも手につけしも定まる過去の因縁事、しかし後難の恐れあれば、本意ならねど兩人の死骸をば、納戸の戸板に打ち付けて、不義密通と書き記して、根無川へ押し流

さん。こゝは端近奥の間で用意よくば裏道から、

早う――」

に

「実に尤も、幸い隣の団助を」

と、表へ出て隣の戸口そつと覗いて声ひそめ

「団助――」

に、出てくる団助、水庵差し寄り耳に口

「ナア」

「ウン」

「ナア」

「ウン」

頷き囁き兩人は、二人の死骸を引つかたげ奥の間
さして入りにけり。最前より始終その様子、窺ひ
聞いたる直助権平、物陰より現れ出で、

「ヤア、科なき女房家来まで成敗の羽宮伊右衛門、

代官所へ注進」

と、駆け出す帯際引き戻し

「ヤアどこへ――、大事を聞いたは汝が寂滅、覺
悟ひろげ」

と斬付くる。こなたも我武者のだんびら物、二打
ち三打ち戦ふ中、手練の羽宮に斬立てられ、逃ぐ
るをばつさり後袈裟

「イデこの上は我が子の死骸、せめて人目を包ま
ん」

と、幸い片方に有合わす石を重りの水葬礼

「南無阿弥陀仏」

と井筒の中、打込む間もアラ不思議や、俄に家鳴
り振動して、いづくよりかはあまたの鼠

「コハ心得ず」

とためらふ中、伊右衛門目掛け飛び掛かるを

「シヤ面倒な」

と斬払ふ、刀は稲妻、燃え立つ陰火、数は二つか
三ども廻る報いは末の世に、残れる四谷怪談の
因縁かくと知られけり

なつまつりなにわかがみ

夏祭浪花鑑

【解説】

延享二年（一七四五）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛、竹田小出雲による全九段の世話物です。浪花の夏祭りを背景に、市井の男の友情と心意気を描いたこの作品は、人形浄瑠璃、歌舞伎ともに人気作となっています。

【主なあらすじ】

泉州浜田家の家臣玉島兵太夫の息子磯之丞と恋仲の遊女琴浦は、横赤黨する大鳥佐賀右衛門らから何かと妨害を受けますが、魚屋団七と女房お梶、元侠客三婦や義兄弟の契りを結んだ徳兵衛が、二人を助けるために働きます。磯之丞は訳あって人を殺めてしまった為に、琴浦共々三婦の家に身を隠しています。たまたま徳兵衛の女房お辰が夫を迎えに備中から来たので、三婦は磯之丞をお辰に託すことにしました。そこへ団七の育ての親、舅でもある義平次が金目当てに現れ、団七に頼まれたと嘘をつき琴浦を連れ出します。それを知った団七は慌てて追いかけて、もみ合ううちに舅を殺してしまいます。捕り手に囲まれた団七は、徳兵衛の機転で一旦は逃れますが、ついには縄打たれてしまいます。しかし、磯之丞や兵太夫らがその減刑を求めるのでした。

※優者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

長町裏の段

追駈くる

神と仏を荷ひ物雖し立てたる下寺町、高津宵宮の賑ひに紛れて急ぐ眞義平次、駕籠の簾すだれを細引でぐる／＼巻きの中にはか網、追立て行くを後よりも

「オ、イ、」

「ア、駕籠の衆、早うやつてくだされ、早う、」

「待つた／＼。コレ申し親仁様、この女中は知つての通り、恩ある方からの預り人、それをこなた、どこへ連れてござります。コリヤてつきりと悪者に頼まれ、金にする気であらふが、さふしられてはこの九郎兵衛の顔が、どうも立ちま

せぬ。コレ申し親仁様、エ、こなたは／＼、こなたはなふ。

この中も内本町の道直屋で、田金侍に出で立ち、鷹香炉をもつて五十両の騙り事。エ、マ見下げ果てた。重ねてきつと

と云うてからが、嗜む心もあるまい。ヤアコレ駕籠の衆、大儀ながらその駕籠、後へ戻して貰はう。サア早う、」

「ア、コ、コリヤ待て、待て／＼。なんぢや、たしなむ心があるまい。見下げ果てたとは、へ、忝ない。その愛想尽かし待つてあたわい。コリヤ、六年この方おれが娘を女房にして、慰みものにして。サア揚代せふかい」

「サアそれは」

「それはとは、ヤイ、アノ／＼な恩知らずめが。コリヤヤイ、おのれは元龜無咄七というて粹方仲間の小歩き。貰ひ喰ひで暮してをつたを引上げて」

「ア、申し／＼親父様、なにもそれをこゝで仰しやらいでも」
「言つたらなぢやい、言つたらなぢやい。エ、言はいでかい。その後堺の浜で魚売りさせ、またその上にいつの間、やら娘のお櫃とち／＼りやがつて、市松といふ子までへり出さしをつた。それからアノ月々の当てがひ。取るがよき」

に目を眠ねぶつてゐる中、乳守の町で喧嘩仕出し、和泉の牢へ構つて、コリヤ百目の上女房子を、誰が養ふたと思ふぞい」

「サアそれはみな、お前様のお世話」

「ヤイ／＼抜かさない／＼。せめてその入目を入金月さと思ふて、儲け事にかゝりや、おのれが道真屋の内にけつかつてよぶ／＼を上げさせたな」

「イヤ、それはその場のツイ」

「まだ抜かすかい／＼。今日琴浦をちよろまかして来たのはナ、惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し、大金にする気ぢやわやい」

「イヤサ、それではの九郎兵衛がどうも顔が」

「立たぬ、立たぬか。アノ長々おとが頤を養ふた、コゝ、この顔が立たぬかやい。ただしちらの、コゝこの頼母が立たぬか」

と、立蹴たちげにはつたと蹴られても、『舅は親』と無念を堪へ、齒を喰ひしぱりゐたりしが、

『どかく詫しひるに如くはなし』と、揉み手の上に膝折りかゝめ

「イヤ申し親仁様、段々の仰せ、一つとして返す詞もござりませぬ。長々お世話の上、またしても入金儲けを妨げ、お腹の立つは御本も。ガもこれからはふつ／＼とお邪魔は致しますまいが、あの女中のごときは」

「イヤならぬ」

「サ、左様でござりますれど」

「エゝならぬわやい」

「サ、／＼そこでござります。折角あなたもこれ程までなさ

つた事。素手でお詫たのびも申しますまい。ヤ幸ひ友達共が、

頼母子を致してくれまして、／＼に三千両ござりますれば、これをお前へ渡しませふ程に、身の代取つたと思し召し、琴浦殿を三廻が方へ戻して下され。外へやつてはこの九郎兵衛の顔が、どうも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢや、コレ親仁様

一生の御無心。申し／＼コレ申し」

と、手引き御引き膝をつき、無念涙の男泣き、親といふ字は是非もな。義正次も三十両、当分取りに少しは柔らぎ

「その金われ、そこにあるのかい」

「エイ／＼その金はここにぎります／＼」

「そりやアノ、ほんまの金かいやい」

「エ、ほんまでござります。エイこの通りでござります／＼」

「ム、琴浦をあつちへ渡せば、百両が物は確かにあれども、

かゝりや繋がる娘の縁。よいは、ただやつたと思ふて、三十

両で戻してやう」

「エ、そんなら戻して下さりますか。ヤレ嬉しや／＼」

「ア、コレ駕籠の衆、今乗せて来た所まで駕籠を戻して、駕

籠代も酒代も存分先で取られい。暑い時分に御苦労ぢやがモ

ウ二肩やつてくれ」

「ヤ駕籠の衆、確かに届けて下されや。暑い時分ぢや、御苦

ぢやが頼んだぞや／＼」

「コ、兄、兄、マンこつちやへ来い、マンこつちやへ来いや
い。／＼／＼兄、暑い、エ、暑い」

「エイ左様でござります。ヤモきつい暑いでござりますな」

「コ、兄、そなたは定めて嬉しかろう」

「イヤモ、この様な嬉しいことはござりませぬ。親仁様、あ
りがたうでござります、ありがたうでござります」

「ヨ、さうであらう／＼。時に俺にもさう、悦ばして下さい
いの」

「い」

「ヤ、悦ばせ、とはなんぞでござります」

「フレイ／＼、今の、ソレ約束」

「エ、約束の。ソリヤマアなんぞでございましたな」

「これはしたり。あんまり日が長いので、物忘れをしておた

かいのハ、／＼、ソレ今の約束の三十両、受取らふかい」

「エ、そのカ、金でござりますか。その金は／＼にはござ

りませぬ」

「チエ、ヤレその駕籠やるのぢやない、駕籠戻せ」

「申し、親様くく。マ、マ、待つて下され」

く

「エ、腹の立つく。うま、一杯やりをつたなア」

「イエ、なんの申し、左様ではござりませぬ。うちへ帰れば心当が。マ、マア、ここを放して下さりませく」

「ヤアどこへ。うぬがやうな売憎めは、まいすかふして腹癒うか、かふしてくれうか」

と、捻ら廻し引廻せば

「ム」

「その面付きなんぢやい。肩臂張つてその眼付きなんぢやい。

コリヤヤイ、舅は親。ア、慮外ながら、親に向つて白眼

ケ、蹴潰すぞ」

「ム、ム」

「無念なか、口惜しいか。ムハ、泣くかいやい。ア、可愛

や可愛やな。ド、その頤をこの雪駄の皮でさすりいがめ

てやうか。コリヤこの頬板で俺を騙しやがったか。コ、この口

で騙しやがったなコウ、カープツ、これ喰へ」

「ア痛た、ア。親様。モこれ程になされたら、御存分で

ござりませふ。モウ、御簡なされませく。プツ、コ

リヤコレ男の生面いきづゐを」

「割つた。割つたがどうした」

「ウム、コリヤモウいつぞ」

「なんぢやいな、おのりや脇差をびこつかして。

ア、コリヤ面白い。サア、斬れ」

「ア、イヤ申し滅相なく」

「サア斬れ、イヤ斬りよ。サア斬れ、この赤鯛をやつて見る

か

「ア、申し危なげであります」

「ア、斬りよ、斬れ〜」

「なんのわたくしがお前様を」

「イヤ〜切る気であらふ。コノ尻からやるか。サア、斬れ〜」

「ア、滅相な〜」

「コノ腕からやるか。サア斬れ〜、斬れ」

「ム、ム、ム」

「コリヤ、親ちやぞ、親ちやぞよ。一寸斬つたら二尺の、竹

鋸で引返す。サア斬れ〜、斬れ〜」

「ア、申し危なござります〜」

「突け〜、〜」

と、差し付け突き付けせり合ふ中、思はず鼻が耳の根すつきり

「サア、サ、斬れ、何しろるんぢや、斬らぬかやい、斬る氣であらふが」

「ア、危なござります、危なござります。危なござります」

「アツ、冷めた。兄、わりやおれを斬りやがつたナ」

「なんの滅相な」

「ヤレ人殺しぢや」

「申し怪我でござります、怪我でござります」

「イヤ〜親殺しぢや〜、〜」

「ア、コレ、声が高い〜、声が高ござります、声が高い

〜。ム、コリヤモウ是非に及ばぬ、毒喰は^{どく}は^は」

「てうきぢや、よつきぢや

「てうきぢや、よつきぢや、てうき、よつき〜。悪い

人でも舅は親、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏
八丁目、指して

